

8月15日、靖国参拝の際の心得

いや、まったくもってご無沙汰しておりました。

店主殿から催促のないことをいいことに皐月（5月）から文月（七月）と、ときは流れ申した。

皐月ごろは、拙著『サムライと日本刀』の仕上げ、校閲に追われていたことと、その後、ゲラが上がり、その校正、そして再校。ひと段落すると新選組サイト、刀剣関係サイトらへの近刊予告のインフォメーションと、何かと忙しかったのであります。また、拙者の本家にブログ（草莽奮戦記）は3日に一度としたことから、気にはなっておったのですが、ついつい、そのうち、そのうちで日が経ってしまった。ご無礼つかまつった。

言い添えておかねばならぬのは、『サムライと日本刀』で日本刀の鑑賞でのご意見を店主、また刀鍛冶体験工房の刀匠に賜った。あのときのご意見<忠告>があったからこそ脱稿できた次第。改めて、この稿を借り、お二人に御礼申し上げる。

さて、本日、武道通信かわら版も配信し終え、ふと“書く気になった”。

が、何を書くか……。う～ん。（クーラーが故障していて頭の中も摂氏30度をこえた）

『サムライと日本刀』の宣伝も、もう飽きた（笑）。

そう、今朝の武道通信かわら版の「新選組も靖国神社に祀ろう！」を読んでいただいたものとして補足しよう。

靖国神社（当時は東京招魂社）の最初の神様は、鳥羽伏見から箱館戦争までの戦死者3588柱であった。当然、勝者の官軍だけである。

明治10年には西南戦争（役）の政府軍の戦死者も祀られた。明治維新の立役者西郷さんも近藤勇や土方歳三と同じ朝敵となってしまったから祀られていない。

靖国神社の原型は、長州藩が忠義の戦死者を毛利家の菩提寺に仏式供養を行ったことにある。当時、長州も討幕王か、佐幕かで内ゲバがあった。その犠牲者を敵味方の区別なく一同に祀り、藩をまとめようとしたのだ。攘夷の心は同じのことからだ。

その2年後、ペリー来航の年には神式で招魂祭として行われた。招魂とは死者の魂を招きかえすこと。つまり骨を収め慰霊するのではない。お寺ではまずいのだ。

おわかりか。兵頭二十八氏が《近代日本のために一命を捧げた戦死者が、8・15などという攘夷にとって不吉きわまる日にわざわざ神社に呼び出され、大きくお祭りしてもらいたいはずがあるかどうか、読者は判断しましょう。》

招魂社とは、攘夷の戦いで亡くなった者の魂を呼び寄せ感謝し、我らも戦うと誓う場なのである。それなのに、なんでまた、よりによって英霊には屈辱である敗戦の日に霊を招き、慰霊するのか。英霊たちはどんな気持であろうか。すなわち原爆の碑と同じ、「もう過ちはおかしませんから」と同じになってしまうではないか。英霊に対し無礼きわまる。

兵頭二十八氏は、それを云うのである。

では、なぜそうなったか。このタブーに挑んだのが平成14年刊の武道通信十九ノ巻。「武士道と宗教」である。

靖国参拝が正義だとする保守論客の御仁たちには耳が痛いから、兵頭二十八氏の具申を無視した。靖国神社もしかり。武道通信が微小な部数であるからではない。靖国関係各位にかなりの数を献本した。

まだ在庫はある。ぜひ一読されよ。（版元はつい宣伝してしまう）

8月15日に行くなどというのではない。拍手を打って頭を垂れたとき、攘夷のとききたれば、我もあなたたちと同じように勇敢に戦い、勝ちますと誓ってほしいのだ。

追記：靖国神社の原型にもどって、当時の敵味方の振り分けでなく攘夷の命を賭け散った者たちも祀ろうではないか。西郷隆盛しかり、近藤勇、土方歳三も。そう拙者はいいたいのだ。

平成二十一年 文月之二十日